

川尻における水辺の地域形成に関する研究

Research on local formation of the waterside in Kawashiri

熊本大学工学部社会環境工学科

安永 龍一郎

1. はじめに

熊本市の南部に位置する川尻は南部に緑川が流れており、古くから水と深く関わって生活してきた。緑川は昔から氾濫が起きやすく加藤清正時代から多くの治水・利水を兼ねた土木構造物が数多く建設されてきた。その多くが現在も利用されている。本研究は緑川と川尻を繋ぐ土木構造物の一つである中無田閘門に着目して土木構造物が地域形成に影響を及ぼしたかを調査し、川尻の地域形成を把握することを目的とする。

2. 緑川流域の概要

緑川流域の特性を明らかにする為に流域の自然、人口、産業そして治水の歴史について調査し整理した。また、川尻と繋がる加勢川の概要も並べて調査を行った。

2.1 緑川の概要

緑川は多くの支流がある河川となっており、その為沿岸は広い地域に渡って昔から常態的な内外水氾濫地域が広がっている。緑川の水運が産業を発達させる半面、この氾濫が産業や経済の発展を阻害している要因の一つであることから昔から緑川は治水事業が行われてきた。

2.2 流域の産業と特性

緑川流域の産業を上流中流下流の三つの地域に分けて分析した結果、産業は地域によって個性があるが、どの地域も農業が強く緑川の水の恩恵を受けていた

2.3 緑川流域の治水の歴史

治水事業の変遷を時代で分けて分析した。結果、近代以前までは灌水させることで洪水の被害を小さくしていた。その為に起こる穀物の収穫高減少を抑える為に近代以降の治水事業として緑川河川改修工事が始まった。

2.4 緑川の土木構造物

緑川流域の土木構造物を示した。成立時期はそれぞれ違うがほぼすべての構造物が現在も使われており、緑川の治水に関係していた。

3. 中無田閘門建設史

緑川流域の地域の物流の拠点となっていた川尻にある中無田閘門に着目することにより緑川との繋がりなどを把握した。

3.1 建設背景

昭和の改修工事により建造された六間堰により遮断された緑川と加勢川の航路を作る為に建設された。

3.2 建設目的

当時は川尻の御蔵も役目を終えており物流とはほとんど関係しておらず、当時の漁民が外海に出るための航路として使用するための構造物であったことがわかった。

3.3 昭和期の舟運

川尻は上流から舟運で運ばれてきたものを二次加工し加工品を舟で輸出していた。

3.4 中無田閘門概要

中無田閘門の位置やゲートの方式、動作手順などを示し基本事項の把握を行った。

4. 川尻の地域形成

川尻の地域の特徴と緑川舟運との関係を地図などを分析し把握した。

4.1 川尻の概要

川尻はかなり早い時期から菊池一族の拠点として開発されており、戦国時代には軍港として利用され加藤清正時代に船着場周辺が整備されて現在に至る。

4.2 川尻の変遷

川尻の変遷を三つの時代の地図を用いて分析をしたところ川尻の骨格宝暦時代には出来あがっていた。

4.3 川尻の産業

川尻の昭和の産業には仲仕や船乗りなどかなり舟の運航と深く関係しておりまた製桶や指物大工など舟の積荷とも深く繋がっていることがわかった。



5. おわりに

二章では土木構造物が各流域の産業を繋ぐための舟運を守ってきたことがわかった。

三章では中無田閘門の資料から分析を行い、結果閘門の役割は物流とは直接的には関係がなく当時の漁民の為の運航路としての役割が主だったことがわかった

四章では地図を使い川尻の地域変遷を追った。産業は比較的昔から舟運で栄えた酒造や工芸品が残っており1700年頃に舟運で作られた街の外郭が現在の川尻の地域の基となっていることと、川尻の産業は舟運によって上流域や中流域と繋がっていることがわかった。

閘門は産業に関わってきたが産業は川尻の東に広がっているため、骨格が完成していない箇所も含めて構造物の影響を考察しなければならない。